シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

(Ⅳ)

『アントニーとクレオパトラ』論 (その一)
アントニウスとクレオパトラの恋

木　村　輝　平

アントニー　われら2人には何か新たな楽しみのないことが
　　ひと時もあってはならぬのだ。
　　(1. 1. 46〜47)

(一)

陽性で遊び好きだったアントニウスの性格からして，彼の女性関係が派手だったことは容易に推測される。じっさい，プルタルコスでも彼が女優を愛人にしたり，人妻を追いかけたりしていたことが伝えられている(『アントニウス伝』6節)。結婚生活の面でも，彼は当時のローマ人によくあるように，何度も結婚，離婚を繰り返している。正確に言えば，クレオパトラと恋に落ちるまでに，彼はすでに3人の妻を迎えているので，その後のオクタウィア，クレオパトラとの結婚を加えて，生涯5度結婚したことになる。

キケロによるとはじめの妻はファディア (Fadia) という女性で，ある解放奴隷の娘だったという[①]。2度目の妻はアントニア (Antonia) と言い，名前にも表われているように彼の従姉妹であったらしいが，例のドラベッラと密通したという疑いから離婚している（『アントニウス伝』9節）。その次がアントニウスの妻としては比較的よく知られているフルウィア (Fulvia) である。

ところで，アントニウスとフルウィアという女性の取り合わせには，少し検討してみるとなかなか面白い面もあることがわかる。というのは，実はこの結婚はフルウィアにとっても3度目だったのだが，その2人の前夫というのが，他ならぬ，クロディウスとクリオというアントニウスとは浅からぬ関係にあった人物たちであったからである[②]。この2人についてはすでに前回にも触れたが，彼らは大カエサルの時代にローマの政争にひとかどの役割を演じた人物なので，プルタルコスでもいく度か言及されている。2度目の夫クリオについては，彼は道楽者で，若い頃アントニウスを遊びの世界に誘い込んだ張本人だったと伝えられている（『アントニウス伝』2節）。やがて彼は，カエサルに買収され，その手足となって働くようになったのだが，アントニウスも彼にならってか，カエサルの部下になり大いに働くようになる。またクロディウスも悪名高い享楽家だったのだが，政治家としては民衆に人気があり，過激なタイプであったらしい。彼も一時期カエサルに抱き込まれて力を貸していたが，やがてカエサルに見放されてしまう。アントニウスは若い時，このクロディウスとしばらく政治行動を共にしたこともあったらしいが，やがてその狂的行動に嫌気がさして別れたという。

この2人の夫と死別したフルウィアが次に結婚することになったのが，アントニウスだったわけだが，彼女の夫は，3人が3人とも無頼派でカエサル方の政治家だったわけである。この後の点で言えば，フルウィアは前々回で扱った小カトーの娘ポルキアという女性とはまことに好対照である。父の小カトーは大のカエサル嫌いであったし，彼女の嫁いだビブルスもカエサルの敵であった

上，次の夫はカエサルを倒したブルートゥスだったのだから。

常識的には，フルウィアとアントニウスの結婚の場合はカエサルの肝煎りであった可能性は十分考えられるが，事実，プルタルコスでも，この２人の結婚に関して，身持ちの定まらないアントニウスに身を固めさせたのはカエサルだったという趣旨のことが書れている（『アントニウス伝』10節）。とは言っても，必ずしもこの２人の間の愛情が薄かったわけではなかったようであり，それを示すエピソードもあるのだが，この紹介はもう少し後に回したい。

さて，このフルウィアという女性は並の女性とは違い，勝気かつ活発，アントニウスは大いに尻に敷かれていたらしい。

> クロディウスの妻であったフルウィアは機織りや家事に時間を費やすことを心よしとせず，また家庭で夫を支配するだけでは飽き足らず，仕事の上でも彼を支配しようとし，大軍隊に号令した指揮官を指揮しようとした。だから，アントニウスに女性への従順を植え付けたことで――しかも，これは非常によく身に付いたのだが――クレオパトラはフルウィアに感謝しなければならないのである。
>
> （『アントニウス伝』10節）

フルウィアのこのような性格といい，経歴といい，この女性との結婚はアントニウスという人物の思わざる一面を語るものだろう。

やがて，アントニウスはオリエントでクレオパトラに会い，一緒に暮らすようになるが，ローマに残されたフルウィアの方は騒乱を起こし，オクタウィアヌスの勢力と対峙することになる。事件の経緯は複雑で，史家の記述にも喰い違いがあるが，結局最後には，フルウィアとアントニウスの弟ルキウス（Lucius Antonius）が連合してペルシアという場所でオクタウィアヌスの軍と戦うことになったことは間違いない（前40年）。フルウィアの行動の動機としては，当然プルタルコスの説明のように，アントニウスを呼び戻すためであったと考えられるが（『アントニウス伝』30節），他の史家などによると，フルウィアが行

動に駆られたのが不思議でもないような政治情勢の変化もあったようである。[3]

それはとにかく，ペルシアでの戦いはフルウィア側の敗北に終わり，彼女は逃走後しばらくして死んでしまう。プルタルコスではそこのところはアントニウスに会いに行く途中病気になり，ギリシャのシキュオンで死んだことになっている（『アントニウス伝』30節）。ところが，アッピアノスによると事情は次のようだったことになる。[4] すなわち，戦いに敗れて逃亡したフルウィアはアテネでアントニウスに再会できたのだが，アントニウスの応対は冷たく，その妄動をきびしく咎めるものだった。この仕打に深く傷ついた彼女は自暴自棄となり，アントニウスが去った後シキュオンですぐ病死したというのである。両者を較べてみると，プルタルコスの話の方は彼によくあるように，記述の短絡によるものという疑いも濃厚である。

ともあれ，フルウィアの死はまだ決定的対立を望まないアントニウスとカエサルの双方にはまことに好都合であった。当時，カエサルの姉オクタウィアは嫁いだ夫を失って，3人の子供を抱えた寡婦となっていたが，この女性とアントニウスの間の婚議がまとまり，アントニウス，カエサル両者の和解ができる。もちろん，これは政略結婚だが，こうしたことは当時としてはそれほど珍しいものではなかった。中でも一番よく知られた例は大カエサルと大ポンペイウスの取り決めたものであろう。前59年，クラッススとともにいわゆる3頭政治をはじめていたポンペイウスとカエサルは，ポンペイウスがカエサルの娘ユリア (Julia) を娶ることで両者の提携の絆としょうとした。[5] その際すでにユリアには婚約者がおり，式も数日後に迫っていたのだが，ポンペイウスがその男にこれもすでに先約のあった自分の娘を与えるということで，憤懣をなだめたという。ポンペイウスはこの若い花嫁を溺愛したそうだが，ユリアが後に病死すると二人の関係は冷え，悪化の一途をたどることになったのはよく知られている。

ところで，オクタウィアとアントニウスの結婚はもっぱら政治的配慮から生

じたものではあったが，彼女はアントニウスに献身的に仕え，二人の仲もけっして悪いわけではなかったらしい。この夫婦から２人の娘が生まれるが，この姉妹の家系から，後にカリグラ，クラウディウス，ネロなどの皇帝が出ることになるのである。

（二）

クレオパトラ７世は前51年，17歳で弟プトレマイオス13世と共同統治の形で王位に就いた。その３年後，カエサルがポンペイウスの後を追ってエジプトに来た時，クレオパトラは権力争いから弟のプトレマイオス側によって宮廷から追放されていた。そこでクレオパトラはカエサルの援助を求めるのだが，引き受けたカエサルの軍は少人数で，しかも敵地の中ということもあって大いにてこずる。それでも最後には勝利を収めるが，その間のいくつかの興味深いエピソードは『カエサル伝』の中に紹介されている。やがて，カエサルはクレオパトラとの間になした子供が誕生しようという頃（前47年７月か）新たな戦いのため彼女を後にシリアからアジア方面に去る。しかし，しばらくしてクレオパトラは夫ということになった幼少のプトレマイオス14世と先の子供カエサリオンを連れてローマに上りカエサルを訪れている。[6] 以後クレオパトラはカエサルのティベル河畔の別荘を住いとして，カエサルが暗殺されるまでローマに滞在したらしい。[7]

ところで，クレオパトラの恋人はアントニウス以前にはカエサルだけかと思うと，『アントニウス伝』には次のような注目すべき箇所があり，これによると，他にもう１人，しかもローマ人の恋人がいたことになる。

他方，クレオパトラはデルリウスの言葉をあてにし，また，以前にユリウス・カエサルと大ポンペイウスの息子グナエウス・ポンペイウスから美貌の故に得た親愛から，も

っと容易にアントニウスの心をつかむことができるのではないかという希望を持ちはじめた。というのは，カエサルとポンペイウスが彼女を知ったのは彼女がまた世間を知らない小娘の頃だったからである。

（『アントニウス伝』25節）

このグナエウス・ポンペイウスは大ポンペイウスと同名で（以後，区別のためグナエウスと呼ぶ），その長男であるが，父の死後も頑強にカエサルに抵抗したことで名を知られている。彼はファルサロスの戦いの後，アフリカのリビア方面に逃れ，そこから進んで地中海のバレアル諸島を占領し，さらに前47年から46年にかけてスペインに移り，弟のセクストゥス（Sextus）と合流している。前45年にはスペインのムンダでカエサルと戦い非常な窮地に追い込むが，結局は敗れて，その逃亡中に捕まり，殺されてしまう（『カエサル伝』56節）。

この人とクレオパトラの恋愛については，上のプルタルコスの言及の他には資料らしいものは見当らない。時機について考えてみると，ファルサロスの後，エジプトにはすぐカエサルが入っており，カエサルがそこを去った頃には自分はスペイン方面に行っていたはずであるから，エジプトでクレオパトラに会っている暇はなかったことになる。（たとえあったと仮定しても，敵地となったエジプトに行くはずもないが。）となると，どうしてもファルサロス以前を考えなくてはいけないわけで，前49年，内戦がはじまったばかりの時，グナエウスは父の地盤であったエジプトに行き，艦隊を徴発したことがあるので[8]，二人がもしも出会っているとすれば，たぶんこの時だろう。（もちろん，それ以前にも何かの用事でグナエウスがエジプトを訪れているということもあり得るが……。）いずれにしても，それから二人がどんな関係になったか詳細は不明である。

ところで，シェイクスピアはこの一見なんでもないプルタルコスの記述を見逃さず，クレオパトラとニーアス（グナエウス）との関係に触れている。

クレオパトラ　……額の秀いでたシーザー，
あなたがここにいらっしゃった時，私は
王者を養う糧であり，また偉大なポンピィも
足を止め，私の顔に熱い眼差しを注いでくれました……。
（1. 5. 29～32）

ここで“偉大なポンピイ”（great Pompey）と言っているのは，大ポンペイウスのことではなくて[9]，息子のグナエウスであることは，先のプルタルコスの記述との関連で，間違いなかろう。もっともここだけから言えば，この言葉を常識的に考えられるように，「大ポンペイウス」と取れないことはない[10]。つまり，シェイクスピアが不注意にそう書いたか，あるいは観客にわかりやすくするため意識的に混同したものと考えられるわけである。（グナエウスは父の死後，自分もやはり“magnus”（大）を呼称したらしいが，プルタルコスには言及されていないので，上の“great”とは関係ないものと判断してよかろう[11]。）ところが，次の箇所では，上のせりふに照応する形で，ニーアス・ポンピィの名前がはっきり示されていて，シェイクスピアは正確にこの人物を認識していたことは間違いない。

アントニー　はじめからきさまは死んだシーザーの
冷たい食べ残しだった，いやニーアス・ポンピィの
食べさしだったのだ……。
（3. 13. 116～118）

これで先の箇所の“great Pompey”が指すものがニーアスのつもりであることがはっきりする。（父も同名であることは残るが，先のプルタルコスの文に照合してみればこれは考え過ぎだろう。）ところで，この劇には他にも「シーザー」の呼び方に関して，上の場合と似た“great”の用法が2箇所にある。どちらの

場合も，クレオパトラがオクティヴィアスを "great Caesar" と呼んでいるところであるが，これはポンピィの場合の紛らわしさに一脈通じるものであり，シェイクスピアの一種の癖を表わしていると考えられるかも知れない。[12] もっとも，よく考えてみれば，クレオパトラが自己の主張を強めるために，ポンピィ（ニーアス）やシーザー（オクティヴィアス）を持ち上げる表現を用いるのは自然であり，"great" の使い方自体には不都合があるわけではない。（ただし，翻訳の場合は誤解を生じやすいので「大ポンピィ」，「大カエサル」の訳語は避ける方が賢明かと思われる。）

グナエウスと関連するせりふはもう1箇所あるが，今度の場合はその言及はあまりはっきりした形にはなっていない。

アントニー　3度も心変わりの売女め！
（4. 12. 13）

このせりふは最後の決戦で敵と戦うはずの海軍が，そのまま敵側に投降してしまったので，これをクレオパトラの裏切りのせいであると考えて，アントニウスが怒り狂っている場面でのものである。ここの「3度も心変り」という文句が何を指しているかということは，劇の状況からはぜひとも必要なこととは思われないが，考えるとなると，少々面倒なことになる。これには色々な考え方ができるのだが，ニュー・ケインブリッジ版，ニュー・アーデン版，どちらの編者もストーントン (Howard Staunton) の版の注釈を引いているところをみると，結論としてこれがもっとも妥当に考えられるからであろう。それによれば，これはクレオパトラが「ジュリアス・シーザーからニーアス・ポンピィに，ポンピィからアントニー，そして（今アントニーの疑いでは）アントニーからオクティヴィアス・シーザーへと乗り換えようとしている」ことを指すことになる。上に挙げた例などからも，たぶん，これがシェイクスピアが頭に描

いていた内容であろうと思われる。ただ，少し気になるのはクレオパトラの恋愛の順序である。先に述べたように，史実をたどると，もしグナエウスとクレオパトラの恋が存在したとするなら，それはどうしてもカエサルとの関係以前に来なければならないのである。だから，上のせりふに付す注釈としてはストーントンの言っている順序を逆にして「ニーアス・ポンピィからジュリアス・シーザーに」とするのが正しいのである。このことで言えば，『アントニーとクレオパトラ』からの上の二つの引用はどちらもシーザーの名前がポンピィの名前の前に来ているのだが，これはプルタルコスでもその順序なので，その踏襲によって起ったものであろう。筆者などはクレオパトラとグナエウスの恋というのはじっさいには怪しいと思うが，仮にそれが事実とすると，カエサルとポンペイウスの順序はどうしても逆のはずである。もちろん，プルタルコスの記述は時間的順序と断わってあるわけではないから，むしろ重要性の順序である可能性もないのではないので，これをプルタルコスの誤りとするのは早計だが，やはり誤解を招きやすい書き方だったと言えよう。シェイクスピアはあいまいにその矛盾を受け継ぎ，そして注釈を付ける段になって編者たちが決定的につまづいたという次第であろう。

（三）

前41年にアントニウスがクレオパトラと小アジアのキュドノス河畔，タルススで会見した時，アントニウスの年齢は41歳，クレオパトラは29歳になっていた。この二人の会見の模様はプルタルコスの記述それ自体印象的な読物だが，さらにシェイクスピアがこれを『アントニーとクレオパトラ』で取り上げたことでいっそう有名なものになっている。ところで，シェイクスピアはこの出合いを二人にとってはじめてのものとしている（「彼女がはじめてマーク・アントニーに会った時……」2. 2. 191，傍点は筆者）。これはシェイクスピアが典

拠としたプルタルコスの書き方が何となくそのような印象を与えるようになっているためと考えるのが適当と思われるが，プルタルコス自身もじっさい，そうした先入主に支配されていたのかも知れない。しかしながら，野暮なことを言うようだが，史実の問題としては，それが本当にはじめてであったかどうか，たぶんに疑わしいふしもあるのである。

まず，前回でも触れたが，アントニウスは前55年，まだ27歳の時，シリア総督のカビニウスの下でエジプトに遠征してアレクサンドリアを占領し，プトレマイオス12世を王位に復帰させたことがある[16]。その際アントニウスは敵側にも温情を示して，アレクサンドリアの人々の間で名声を博したという（『アントニウス伝』3節）。まず，この時に14歳の少女クレオパトラと会っている可能性はなくはない。

また，カエサルがエジプトに滞在した時には，アントニウスはローマに治まっていたので，この時は会う機会はなかったはずだが，先に述べたクレオパトラのローマ滞在期間には，カエサルの第一の部下だったアントニウスがクレオパトラと顔を合わせていることは十分あり得ることである。

プルタルコスはクレオパトラのローマ滞在については『列伝』のどこにも記していないので，上のような可能性はおそらく考慮に入れなかったのではないかと推察される。しかし，実際には両者がすでに会ったことがあるにしても，その時までにはすでに相当の年月が経過しており，両者にとってそれが劇的な対面であったということにはあまり変わりがないとは言えよう。

ところで，クレオパトラを呼び寄せたアントニウスの意図は政治的なものだったのだが，彼は会うとすぐにクレオパトラの魅力にとりこになってしまう。では，このクレオパトラの魅力とは何だったのか。これを一番よく語っているのはやはり，プルタルコスであるが，彼は次のような説明を与えている。

さて伝えられるところでは，彼女の美は他の女性の追随を許さないというものでもな

かったし，一目で男をとりこにするというものでもなかったが，その応接ぶりや言葉が非常に心持よいものであったので，男は引き付けられないわけにはいかなかった。その美に加えて，会話やおしゃべりに示した優美さ，言葉や仕草を彩る礼儀正しさが人の心を捉えた。さらに，これらにもましてすばらしかったのは，彼女の声と言葉であった。というのも，彼女の舌はさまざまな遊戯，座興に合わせて音色を変える楽器であり，またそれは思いのままにどんな言語にもたやすく変じた……。

（『アントニウス伝』27節）

クレオパトラの魅力と言えば，すぐ美貌ということが連想されるが，この文によればそれはあまり大したものではなかったことになる。（その代りというわけでもないだろうが，声の美しさはかなり強調されている。）プルタルコスは他でも同様で，アントニウスがオクタウィアを捨てて，再びクレオパトラの許へ走った時のことについて「ローマ人たちは彼女〔オクタウィア〕を憐れんだが，それ以上にアントニウスを憐れみ，特にクレオパトラを見たことのある者がそうだった。というのは，美しさの点でも若さの点でもクレオパトラは彼女にまさるものではなかったからである」ときびしいことを言っている。この事については，プルタルコスばかりでなく，他の古代史家の記述を較べてみても，また，残された小数の彼女の肖像からも判断されるが，クレオパトラは一応の美人とは言えても，それ以上の，並ぶものなき絶世の美人というわけではなかったというのが真相のように思われる。もっとも，こういう事はしょせん主観の問題であるし，いくら史料を援用したところで，それ自体がどのくらい頼りになるかは，その性質上，怪しいものであることは確かであるが……。

上でプルタルコスが他にクレオパトラについて語っていることの中心は，結局，彼女の傑出した社交能力ということであり，これが実は彼女の重要な魅力だったということになろう。そして，この才能は彼女の素養とか才知と表裏一体をなしていたわけだが，このような知的側面はクレオパトラについて一般に知られることの少ない，意外な一面と言えるだろう。だが，プトレマイオス家

の王女として，教養，たしなみを十分身につけていたことに不思議はないし，またクレオパトラが明敏な頭脳の持主であったことは，実は，上に示された外国語の才能からばかりでなく，色々なエピソードからも窺われるところなのである。

ところで，『アントニウス伝』を読んで読者自身が感じるクレオパトラの魅力というものは，上のプルタルコスの説明に表わされたものとは少しずれがあるように思われる。というのは，ほとんどの読者にとって，彼女の最大の魅力はなんと言っても，彼女の行動に現われた，その自由で奔放な性格にあると考えられるからである。そこで，これを示すような典型的なエピソードを一，二，見ることにしたい。

ひとつは，アントニウスが死んでクレオパトラがカエサルに捕えられた時に起きた事である。

結局，彼女はカエサルに自分の持っていた現金，財宝の簡単なメモを渡したが，たまたまそこに財務官のセレウコスという者が居合わせ，彼は忠実そうに見えながら，カエサルにクレオパトラがまだ多くの物を隠していると言って嘘を暴いた。そこで，彼女は怒ってこの男に飛び掛かり，髪の毛を捉えて彼をいやというほど殴りつけた。

（同83節）

またもうひとつの例は，東方遠征から帰って来たアントニウスをオクタウィアが訪ねて来ようとした時のものである。

クレオパトラはオタウィアが〔中略〕あまりに強力なライバルで，しまいにはアントニウスを奪って行ってしまうことを怖れ，軽い食物で体をほっそりさせ，たくみにアントニウスへの恋情のためやつれたふりをした。またさらに，色々に顔つきを変えて，アントニウスが来た時は夢中になった目つきになり，彼が行こうとするとさめざめと泣き出し，悲しげな様子をした。しかも，たびたび泣いているところを見られるようにして

おきながら，アントニウスが来ると，知られまいとするように急いで涙を拭って顔をそむける素振りをした。

（同53節）

上のふたつのエピソードは質においては異なるところがあるが，いずれの場合も，奔放でいてどこか憎めないクレオパトラの面目が躍如としているように思われる。このような性質は一見，先のプルタルコスの述べている，どちらかと言うと，知的で洗練されたクレオパトラ像と矛盾するように見える。しかしじっさいは，プルタルコスの言っていることも間違いではなく，クレオパトラにあっては，それらが不思議にうまく共存していたということであろう。そして，根本的には，彼女の性格のこの幅広さが，シェイクスピアが「無限の変化」(2. 2. 241) と表現した彼女の行動・態度の柔軟性・多彩さの源泉なのである。先に述べたクレオパトラの社交的能力というものも，このような彼女の性格と関連させて，そのもっとも深い意味で理解すべきものであろう。

ところでシェイクスピアは上のエピソードを両方とも利用しているが，前のものは5幕2場にほとんどそのまま取り入れられ，後のものもかなり形を変えているが，その実質的内容は2幕2場に盛られている。ただし，5幕2場の場合も，クレオパトラの怒りはその男を殴りつけるというところまでは行っていない。殴るということから言うと，むしろそれは2幕2場でアントニウスとオクタウィアの結婚という悪いニュースを運んで来た使者をクレオパトラが打擲する場面に反映されている。彼女の奔放な性格の表現としては，この場面は5幕2場以上のものであろう。一般に，シェイクスピアはクレオパトラの描写において，プルタルコスの伝える話を忠実に追っているわけではないが，その本質は変化させていないとは言えるだろう。

（四）

アントニウスとクレオパトラの恋愛においては前章で見たようなクレオパトラの性格や能力はアントニウスの心を捉えた時ばかりでなく，その恋愛が長く維持されることにも役立ったのは当然であろう。クレオパトラにはいわば恋愛の才があった。アントニウスの方は恋愛の才があったとは言えないが，しかし，彼も恋愛に関してはそれほど鈍感な人間ではなかったようである。このことは二人のいわば大恋愛が成立するために重要な素地だったと思われる。

以前にも述べたように，アントニウスの女性関係は華やかだったが，しかしそれは，いわゆる英雄色を好む式の単純なものではなかったようだ。アントニウスは作法・態度に粗野なところがあったことは確かだが，しかしすべてにそうだったわけではなく，女性関係，恋愛方面では豊かな情操を持っていたように思われる。彼のこの感受性がクレオパトラの恋愛面での真価を彼に認識せしめ，プルタルコスに述べられたような恋愛の発展を可能ならしめたと思われる。このような彼の感性を示唆するような記述も，わずかながらも，プルタルコスは残している。たとえば，アントニウスの人柄を紹介している箇所に次のような一節がある。

> ……そしてまた，彼は色恋にもなかなかのものであったが，これは彼をいっそう好ましい者として多くの人々に愛されるようにした。彼は誰の恋でも後押ししようとしたし，また他の者が彼の恋人のことでからかっても怒ることはなかった。
>
> （『アントニウス伝』4節）

何げない記述であるが，これらの事実は彼がうるおいのある性格で，なかなかの粋人であったことを示しているように思われる。

また，フルウィアとの結婚生活の一時期において，次のようなエピソードが伝えられているが，これなどはアントニウスの上で述べたような一面を知る貴重な資料であろう。

さて，フルウィアは少し気むずかしく，また体調が思わしくなかったので，アントニウスは彼女の気を引き立たせ，気嫌よくさせようとした。それで，彼はフルウィアを愉快にさせるため，若者じみたいたずらをしたりした。カエサルが最後の戦役となったスペインから帰って来た時，誰もが彼を迎えに行き，アントニウスもそのために出発した。やがて，突然，カエサルは死んで敵が大軍を率いて押し寄せてくるといううわさがイタリア中に広がった。そこで彼は急いでローマに引き返し，部下の兵士の服装を借りて，暗夜自分の家に現われ，アントニウスからフルウィア宛の手紙を持ってきたと告げた。そこで彼は中に通され，気付かれないように顔を隠したまま彼女のところに連れて来られると，フルウィアは大いに心配してアントニウスは無事かどうかたずねた。アントニウスが黙って手紙を渡すと，彼女はそれを開いて読みはじめた。そこでアントニウスは彼女の首に飛びつき，口づけした。

（同上，10節）

ここでは，彼はいわばフルウィアの恋愛心理とたわむれているわけであり，戦場での勇猛をうたわれた将軍アントニウスがすることにしては意外な気がしないでもないでもない。だがしかし，このエピソードは異性関係におけるアントニウスの心の柔軟性，敏感さを示しており，後のクレオパトラとの関係における心理的交渉の多様性やある意味での深さなどにつながるものであろう。そしてまたこれは同時に，彼の性格の弱さを示すものでもあるように思われ，後のクレオパトラとの恋愛での耽溺の原因をも示しているかも知れない。ここであえて付言すれば，シェイクスピアはこのような弱さを持ったアントニウスにたぶん，一種の共感，または愛情を感じたことであろう。なぜなら，シェイクスピアが『ソネット集』で描く屈折した恋愛感情の世界はアントニウスとクレオ

パトラの間のそれとさほど遠くないように思われるからである。

クレオパトラとアントニウスがタルススで会ってから二人が死に至るまで（前41年から前30年まで）約11年間の経過があるが，中にアントニウスとオクタウィアとの結婚生活や東方遠征の期間など，3，4年の空白があるので，それを差し引いた期間が二人の共に過した年月ということになる。その間クレオパトラがアントニウスをどう扱ったかというと，プルタルコスの次のような記述が，その一端を明らかにしているようである。

> プラトンは阿諛には4通りあると書いたが，クレオパトラはもっといく通りにも使い分けた。というのは，たわむれの時であれ，本気になっている時であれ，いつも色々な新しい楽しみを考察してアントニウスを操縦し，昼も夜も片時も彼のそばを離れず目を配ったからである。彼女は彼とともに賽を振り，酒を飲み，狩にもほとんどの時について行き，運動の際にも姿を見せた。
>
> （同29節）

このように，クレオパトラという格好の遊び相手を得たアントニウスの方は元来遊ぶことにかけては貪欲そのものであり，限度とか自制を知らぬ種類の人間だったから，二人の生活というのは他に類を見ないようなスケールの享楽的なものとなった。二人のこのきわめて享楽的な生活の様を垣間見させてくれるようなエピソードもプルタルコスによっていくつか語られている。

> 彼〔医者のフィロータス〕が調理場に行くと色々な料理が置いてあったが，中でも猪の丸焼きが8匹もあったのに驚いた。そこで，ずいぶんたくさんの客人がありますねと言うと料理人は笑って，いやたくさんでなく，12人にも足りないくらいだと答えた。煮たり焼いたりするものは丸のまま出さなければすぐだめになってしまうからなのであった。〔中略〕アントニウスの食事時間がわからないので一度分だけでなく何食分も用意するのである。

（同28節）

そしてまた，アントニウスは奴隷の服に着換えて町をぶらつき，平民の家の窓や店の中を覗き中の人々とののしり合ったが，クレオパトラも召使いの服を着ていっしょに歩き回った。こんなことでよくアントニウスは人々の嘲りと打擲を浴びて帰ったものであった。

（同29節）

ある時彼は釣に出かけたが，1匹もかからず，クレオパトラの手前，大いに腹を立てた。そこで彼はひそかに漁夫に命じて彼が糸を垂れると水に潜って前に捕えてあった魚をつけさせた。そしてさおを上げて，2度，3度と魚を釣り上げた。クレオパトラはすぐ気付いたがわからないふりをして感心してみせた。〔中略〕たくさんの人がやって来て，釣船に乗り込み見物した。アントニウスが糸を垂れるとクレオパトラはすぐ家来に命じてアントニウスの漁夫よりも早く水に潜り，ポント産のもののような干魚を針先につけさせた。アントニウスはそれがかかると魚をほんとうに釣ったと思い糸を引いたが，上ってきた魚を見て皆大笑いをした。

（同上）

アントニウスとクレオパトラの恋が一般によく知られているのは，二人の地位・身分，その歴史的意義，およびその結末の悲劇性などの故にであろう。しかし，二人の恋の特色としては，上に示したように，その享楽性の濃密度やスケールの大きさなどという点がもっと注目されてもよいであろう。もちろん，シェイクスピアにとってもこの点は大いに印象的であったことは確かで，『アントニーとクレオパトラ』の中には上に紹介した3つのエピソードへの言及がある（1幕1場，2幕2場，2幕5場）。また，これに関連があるかと思われるのは，冒頭に引用したせりふである。この劇のテキストとして残っているのは1623年の第1・4折本であるが，これによるとその箇所は “There's not a minute

of our lives should stretch / Without some pleasure *now*."（イタリックは筆者）となっている。この文章は"now"という語を除けば，意味は明瞭であるが，これを加えると他の部分と意味の統一を計るのがむずかしい。どうしても解釈するとなれば，ケイペル（Edward Capell）のようにその言葉に話し手アントニー（とその相手クレオパトラ）の進み行く年齢への言及が含まれているとでも考えなければならないが，これでは逆にこの語が強調されることになって不自然だし，前後関係から言っても唐突の感は免がれない。この箇所を"new"の誤りとして校訂したのはウォーバトン（William Warburton）であるが，これならば文章に筋が通るし，また先に示したプルタルコスの『アントニウス伝』29節中の表現とも照応しているので，この校訂はたぶん間違いないところであろう。（ちなみに，ニュー・アーデン版は"now"を採り，ニュー・ケインブリッジ版は"new"を採っている。）

ところで，プルタルコスの2人の生活についての記述の中で，シェイクスピアは取り上げていないことで，筆者の興味を引くことがひとつある。それは2人が「まねのできない生活者（の会）」（*ἀμιμητοβίων*）という会を作り，交互に宴会を催おし，信じられないようなぜいたくを行ったということである（同28節）。さらにアクティウムで戦いに敗れた後，状況が絶望的になってくると，この会を解消して，「優雅さや惜しみないぜいたくさの点でそれに劣らぬ」別の会を作り，「死を分かつ者（の会）」（*συναποθανουμένων*）という名前をつけたというのである（同71節）。これだけでは二人のどちらがこのような発想をしたものか明らかではないが，ただアントニウスの場合，「死を分かつ者」の会を作る前に人々の忘恩に傷つけられたからと言って，ファロス島の海岸に人間嫌いのティモーンにちなんだ名前をつけた家を建て，友人との交際も断って，しばらく独り暮らしをしたことがあった。こんなことから考えると，二つの会の発案にもアントニウスが主な役割を果していたのではないかと思われるわけである。そして，もしそうだとすると，アントニウスにおけるこのような退廃

的ではあるが，同時にきわめて洒落た感覚の存在に驚かされるのである。もっとも時代が下って，ネロの頃になると，こうした退廃と洗練がいっしょになったような傾向はより顕著になるが，それもすでに述べたように，ネロとアントニウスとの血のつながりが無関係でないかも知れない。

最後に，プルタルコスではアントニウスと対比されているギリシャ人はデメトリオスであるが，この人の伝記の中で記憶に残る事柄のひとつはラミアという女性との恋である。プルタルコスによると，「ラミアは当時すでに盛りを過ぎており，年もデメトリオスの方がずっと若かったが，ラミアは彼を心持よい言葉，優雅さでとりこにし，多くの女からは愛されたデメトリオスだが，彼女にだけは自分から夢中になった」という（『デメトリオス伝』16節）。この辺はクレオパトラに恋したアントニウスとどこか共通しているところがあるように筆者には思われる。

（1979年12月）

註

① キケロ，『フィリッピカ』，「第2フィリッピカ」2節（ロエブ版）。

② プルタルコス（『アントニウス伝』10節）ではクリオとの結婚は言及されていないが，キケロ（「第2フィリッピカ」）にはクリオとの結婚を示唆する文章がある。

③ たとえば，アッピアノス，『ローマ史』，「内乱篇」5巻2章参照。

④ 同上。

⑤ ところが，ポンペイウスはこれ以前に妻ムキアと離婚しているのだが，その理由というのが，スエトニウスによると，カエサルと通じた嫌疑なのだから，両者の間柄というのも複雑怪奇である。

⑥ スエトニウス，『ユリウス・カエサル』52節。

⑦ キケロ，『アッティクス宛書簡』15巻15節（ロエブ版）参照。

⑧ ルカヌス，『内乱記』2巻，カエサル，『内記乱』3章4節（ペンギン版）など参照。

⑨ ノースの訳では先の「大ポンペイウス」は "Pompey the Great" であるが，"great (または Great) Pompey" という言い方もあるはずで，事実，シェイクスピアは他の作品ではそうした使い方を数回している。

⑩ ニュー・ケインブリッジ版の注釈によれば，プルタルコスの明言にもかかわらず，

シェイクスピアは父子を同一人に見なしていると言う。ニュー・アーデン版はこの形容辞は「誤解を招きやすい」とだけ言っている。

⑪ ただし，次男セクストゥスについては，この劇でこれにやや似た事がでてくる（1. 2. 195前後）。

⑫ 一般に英語では，こうした場合の「大」「小」の区別は elder, younger で表わすが，Caesar の場合は，あまりこうした表現は使われず，Julius/Augustus, Octavius という区別が用いられるのが普通のようである。Julius C. を "great Caesar" という言い方で表わす場合もあるが，どこまで elder に近い意味に用いられているかは判断が難しい。シェイクスピアも "great Caesar" を何回か用いているが，その中で比較的 great Pompey の表現に近いと思われるのは『アントニーとクレオパトラ』中の次の例であろう。

She made great Caesar lay his sword to bed . . .

（2. 2. 232）

⑬ ガビニウスは前58年のシリア遠征時は執政官であったが（前回既出），この時はシリア総督になっていた。